こころを育てる時間

福井県　山田　彩也夏

スマートフォンと車の鍵を籠に仕舞う。水の撒かれた石畳を草履で歩いて、青々と茂る木々を横目に戸を引いた。

「先生、おはようございます。」

十年来、茶道と華道を習っている。まだ八時なのにジリジリ暑くて動きにくい。きっとまた猛暑日になることだろう。時代に取り残されたようなここでは、黒電話が茶色の箪笥の上にいかめしく鎮座していた。寂れたラジオからはノイズ混じりに天気予報が流れている。

今日は久しぶりに着物を着ての稽古だ。一緒に通う祖母は暑さのあまり、すっかり洋服を着るようになった。長襦袢の背中の辺りが汗でひっついてくすぐったい。手持ちの小型扇風機は、生ぬるい風を生み出し続ける。着物は何度も着るのに、このだらけた酷暑には慣れることができない。

しかし、不思議と心は落ちついている。それはまた自分の内面を美しくする。襖を開けるとき、茶菓子を運ぶとき、道具の準備をするとき、お点前の動作すべてに心を配る。

足取りは清々としているが、自然と心は踊っていた。朝顔のねりきり。ほんのり紫色をした爽やかな見た目。それは私の着物とお揃いだ。遇に起こるこの瞬間が好きだった。なんだか無性に本物を見たくなったので、家に帰ったら鑑賞しよう。弟が育てていた青いプランターにのびる朝顔を。

「お気楽になさって下さいませ。」挨拶した際にふと目に入った庭石と草木。早朝にきっと雨が降ったことだろう。水滴が岩の水面に落ちて波紋が広がっていた。茶室は冷房がついていないが心做しか涼しい。平茶碗の見た目も相まってそう感じるのだろう。ひとつは青いガラス。もうひとつは朝顔の絵。

また、朝顔だ。この数分だけで何度も「お揃い」なのだ。俄然、朝顔に興味が湧いた。

茶人の千利休には逸話がある。利休の庭に朝顔が見事に咲いている、という噂を聞いた豊臣秀吉は、茶会の誘いを受けた。しかし、そこに行くと庭の朝顔はすべて切り落とされていたのだ。興ざめした秀吉はうす暗い茶室に入る。一本の光が差し込んだ先には、色鮮やかな朝顔が一輪だけ床の間に飾ってある。「一輪であるがゆえの美しさ。庭のものはすべてつんでおきました。」と千利休が言う。秀吉は「心遣り」に感動したのだった。

この話は、私を大変納得させた。現代に生きる我々に理解できない気がする。安土桃山時代の常人でも辿り着くことのない思考だろう。ふいに茶室に柔かい風が吹き抜けて、茶筅が倒れそうになった。

大量生産、大量消費。替えが幾らでも有る世界。インターネットを使うと、情報が無限に入ってくる。とはいえ、人間の心はそのままである。確かにコンクリートに咲くタンポポに魅力を感じることができる。健気に頑張る花に思える。ここの床の間にも、一輪の百合が生きている。訴えかけられている。良かった。きめ細かい泡が立ったお抹茶を、相手の正面に

合わせて出した。鮮やかな緑からは安らぎをもたらす香りが漂う。

「題材、込められた願いは何か。」先生はよく私に気づくチャンスを与えてくださる。問いかけにより深い茶の湯の世界に没頭するのだ。歴史あるお茶碗、或いは価値あるお茶碗は、地味なものが多い。奇抜でなくても、なにか惹かれる。それらは解釈を私たちに任せているとも感じる。そこに広がる風情が、自分の心が、ありのままに映し出される。茶杓を見つめながら自分なりに解釈する。矢張り、作者の気持ちを汲み取るのは中々難しいのである。知識を蓄えよう。自然への感受性を高めて、いつか粋な返答をしてみたいものだ。かつての風流人の如く、美しさをまっすぐ見つめて、ありのままを愛したい。

これは読書に似ているかもしれない。見る人の価値観で、自由に想像できる点で、茶の湯に通じるものがあると思う。新たな考えや異なる答えに、沢山出会うことができる。

先生の家にいると、なぜか時が止まったように感じることがある。反対に時の流れを意識できる。日常にいながらも、非日常な感覚を味わうのだ。その感覚、思考を誰かと共有できるのは心地が良い。気になる掛け軸の文字、茶道具の好きな箇所、大好きな和菓子について話すと更に心が弾む。拝見のお点前をする時間は、自分の世界が広がっていく感覚に襲われる。

梅雨に濡れた草花がゆらゆらと風に靡いていた。そろそろ、いけばなの時間だ。思っていたよりも長い時間話し込んでいたのかもしれない。いつもは感じないはずの足の痺れがあった。

今日の花材からは、日本特有の奥ゆかしさを感じ取った。本当に綺麗な見頃の花には、到底敵わないから、遠慮する。見上げた空は雲ひとつない晴天だった。今日もまた、自分の「こころ」の赴くままに、生けてみよう。